

研究課題	知的障害児・者における実行機能の機序解明		
氏名	池田 吉史	所属	総合教育科学系 特別支援科学講座
		職名	池田 吉史
APRIN e-ラーニングプログラムの受講 ☒			
【研究成果の概要】（文字の大きさ9ポイント・字数800字～1600字程度） 知的障害や発達障害のある児童は、実行機能（目標に向かって計画的・持続的に取り組む力）に弱さがある。実行機能の要素である「抑制」（課題に関連しない刺激に注意が向かないようにする、課題に関連しない反応が出ないようにする力）は、小学校段階の子どもたちの学習や生活を支えている。効果的な支援方法を考案するため、抑制がどのように働くかという抑制方略を明らかにすることが重要である。これまでの研究から抑制方略は、反応性制御（葛藤場面に出くわしてから注意や反応の制御を始める）と順向性制御（葛藤場面に出くわす前に注意や反応の制御を始める；注意や反応の構えを事前に作る）の2つに分かれること、さらに順向性制御は顕在制御（注意の構えを事前に意識的につくる）と、潜在制御（注意の構え事前に無意識的につくる）に分かれることが明らかにされている。本研究では、小学校特別支援学級に在籍する児童を対象として、潜在制御とその関連要因を明らかにすることを目的とした。 小学校特別支援学級に在籍する児童1～6年生24名に抑制方略をはかるパソコン課題（フランカー課題）を実施した。フランカー課題は「<<<<<」や「<<><<」のような刺激が次々に現れるのを見て、中央の矢印の向きを答えるものである。矢印の向きが揃っているときは反応が早い、揃っていないと反応が遅れる。このときの反応の遅れが小さいほど抑制の能力が高い（横の妨害刺激への注意を抑える力が強い）と考えることができる。また、矢印の向きが揃っていない刺激が連続して提示されると、反応の遅れは小さくなる。連続して提示されると中央の矢印への注意が無意識的に維持されやすくなるからである。そこで、矢印の向きが揃っていない刺激が連続して提示される条件と矢印の向きが揃っている刺激が連続して提示される条件を設定し、成績を比較した。成績の差が大きいほど、潜在制御が高いことを意味する。本研究ではそうして得られた潜在制御の得点と、児童のIQやASD特性、ADHD特性などとの関連を分析した。 本研究の結果から、知的障害や発達障害のある児童において、ADHD特性が強いほど潜在制御の弱さがあることが明らかとなった。ADHD特性が強い児童は、注意の構えが環境の変化によって無意識的に変化しづらいことを意味している。これらの特徴が、妨害刺激へのつられやすさの背景にある可能性が示唆された。			
【研究成果発表方法】 ・本研究の成果について、日本特殊教育学会等の研究大会において学会発表及び論文投稿を行う予定である。			

※発表論文名（口頭発表を含む）、氏名、学会誌等名（投稿中・投稿予定・執筆中）を記入すること。

※本経費を用いて、報告書（冊子等）を作成した場合には、本様式とともに1部を提出すること。

なお、提出された報告書は教育実践研究推進本部を通じて附属図書館へ寄贈する。